援助に関する rent-seeking がある下でのドナー間の援助提供競争に関する分析
―政治経済学的アプローチによる mixed oligopoly と現実へのインプリケーション―

静岡県立大学国際関係学部　飯野光浩 [1]

要旨

開発援助において、中国などの新興国が急速にプレゼンスや影響力を拡大させている。新興国の援助におけるプレゼンスの増加に伴い、経済協力開発機構（OECD）の開発援助委員会（DAC）に加盟している国々は懸念を表明している。それは、DAC の加盟国は援助の定義や実施に関して、規範や基準を遵守し、援助に関するデータを毎年公開している。一方、DAC に加盟していない新興ドナーは十分に情報を公開しておらず、透明性や説明責任に疑問が常に付きまとうからである。新興ドナーの援助は組織的に弱く、また援助を受け取る側である被援助国において、その国の政治的・行政的エリートが新興ドナーと透明で説明責任のある関係を推進することはほとんどない。そのような被援助国のエリートによって交渉された援助は DAC 加盟国との間でも汚職を招くことになることが多い。

本論文の目的は、この現状を政治経済学的アプローチによる mixed oligopoly を用いたモデル分析することによって、インプリケーションを明らかにすることである。第 0 国と第 1 国からなる 2 国モデルを考え、受取国政府のキャパシティ不足により、援助の一部が rent-seeking されている状況を想定する。さらに第 0 国が受取国の rent-seeker の目的関数と自分の利潤を合計した目的関数を最適化すると仮定する。つまり、第 0 国は新興ドナーを想定して、新興ドナー政府と援助受取国政府のエリートとの癒着をモデル化したものである。第 1 国は DAC 加盟国を想定して、利潤を最大化する。このような mixed oligopoly の構造の下で、援助提供国の援助量と rent-seeking の程度との関係、そして、第 0 国と第 1 国ともに rent-seeking がある被援助国に援助する誘因があるのかどうかを分析する。

主な結論は以下の通りである。クールノー・ナッシュ競争、シュタッケルベルグ競争のいずれにおいても、被援助国における rent-seeking と第 0 国と第 1 国の間の mixed oligopoly の下で、rent-seeking の程度がある程度高いとき、第 0 国の援助量は第 1 国の援助量を上回る。次に、どの競争でも第 0 国と第 1 国ともに、rent-seeking と mixed oligopoly がある場合の方が、第 0 国の利得と第 1 国の利潤が大きくなる rent-seeking の程度が存在する。その場合、シュタッケルベルグ競争で第 0 国が追随国、第 1 国が先導国の場合とクールノー・ナッシュ競争の場合、第 0 国よりも第 1 国の援助量が大きいが、シュタッケルベルグ競争で第 0 国が先導国、第 1 国が追随国の場合、第 0 国の方が援助量は大きくなる。

現在、プレゼンスが増加している新興ドナーがガバナンスに問題のある途上国に援助して、それに伴い、DAC 加盟国も対抗して援助しているという mixed oligopoly という形で競争している結果、援助量で見ると、新興ドナーの存在感が増していくのである。この競争そのものがドナーのプレゼンスが増す要因であることが分かる。

---

[1] E-mail address: iino@u-shizuoka-ken.ac.jp
HP address: http://ir.u-shizuoka-ken.ac.jp/iino/